The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外国語学習者の「文化リテラシー」 : 日本人学習者に対するデンマーク語のことわざを一例に
Author(s)	鈴木, 雅子
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2019, 23, p. 29-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外国語学習者の「文化リテラシー」
―日本人学習者に対するデンマーク語のことわざを一例に―

鈴木 雅子

1. はじめに

はじめて筆者が「リテラシー」という言葉を意識したのは大学生の頃であった．「リテラシー」とはどういう意味なのであろうか．改めて辞典で調べてみると下記のように説明されている．

リテラシー［名］（英 literacy）
読み書きの能力。また、ある分野に関する知識や能力。
（『日本国語大辞典』第 2 版）

リテラシー［literacy］
読み書きの能力。識字。転じて、ある分野に関する知識・能力。
（『広辞苑』第 7 版）

「リテラシー」は英語から取り入れられた言葉であり，日本語では「読み書き能力」や「識字」と表現できることが分かる[1]．しかし最近では，日本語に訳されることなく「リテラシー」という言葉がそのままカタカナで用いられているようである．メディアの発展に伴うメディアリテラシーや IT リテラシー，情報リテラシーといった表現，さらには環境リテラシーや防災リテラシーという表現も耳にする．

2.「文化リテラシー」とは

この「リテラシー」という言葉を筆者が意識したきっかけは，実際には Cultural Literacy という表現であった．日本語では「文化リテラシー」や「文化的リテラシー」と訳されている[2]．Cultural Literacy とは，1980 年代にアメリカの教育学者 E. D. Hirsch, Jr.によって造られた用語である．読解力とは単に読み解く能力ではなく，広範囲にわたる背景知識を必要とするという考え方から生まれている（2.1

[1] 学術的には，第二次世界大戦後の 1948 年，日本で初めて行われた大規模な読み書き能力の調査において，リテラシーは「社会生活を正常に営むのにどうしても必要な度合，および型の文字言語をつかう能力である」と定義されている（角 2005：107）．
[2] クラムシュ（2007），谷川（2001）参照．

を参照).

それでは,「文化」とはいったい何なのであろうか. 森住は文化の定義を議論しており, culture「文化」の現代における中心的な意味は「ある特定の時代の、特定の地域や民族の日常生活様式、思考行動様式、価値観で、それぞれの優劣はない」と述べている（森住 2016：203).

リテラシーがある人とは, 読み書きができ, ある程度の文法や語彙を有する人と言える. そこから類推される文化リテラシーがある人とは, 当該地域における生活や行動様式, 価値観を理解でき, またその理解を促す「記号」, つまりそこで話されている言語知識だけではなく, 例えば過去の出来事, 慣用表現, 名称などを知っている人を意味すると筆者は考える.

2.1. 母語教育における「文化リテラシー」

さて, Cultural Literacy という表現を紹介した Hirsch は, 著書 *Cultural Literacy: What every Americans needs to know*（1987）の前書きにおいて次のように述べている.

> To be culturally literate is to possess the basic information needed to thrive in the modern world. (Hirsch 1987: xiii)
>
> ［文化的にリテラシーがあるということは, 現代社会で成功していくために必要な基本的情報を所有することである.］

Hirsch の立脚点は, 社会的, 教育的環境にかかわらず, 全ての子供たちが将来に向けて同等のチャンスを得るためには, 単に知識を習得するのではなく, 国民全体が共有すべき背景的知識があると考えたのである. 教養のあるアメリカ人が知っている, そして, 国民が共有すべき知識としてリストを作成し, 約 5000 の名称やフレーズ, 概念などを挙げている（*ibid.*: 146-215). ただし, リストの内容は固定されたものではなく, 時代に応じて修正が加えられるべき暫定的なものだとも注記している（*ibid.*: 146).

また子供たちへの教育を重んじている Hirsch は, Cultural Literacy という考えを提唱すると同時に, Core Knowledge Foundation[3]を設立しており, そこで自らの考えを初等教育において具現化させている[4].

---

[3] https://www.coreknowledge.org/

[4] Hirsch による文化リテラシーの提唱には様々な批判もある. 例えば, 文化の多様性を尊重する人はリストについて保守的であると捉え, またリストを提示することはそれらを丸暗記することにつながるとの危惧の声も上がっている. しかし Hirsch は「アメリカ人が知っている

2.2. 外国語教育における「文化リテラシー」

Hirsch は多様な文化を背景とするアメリカ人を対象に Cultural Literacy を提唱したが，この考えは当該「国民」にとどまらず，ある言語を学ぼうとする外国人に対しても応用することができる．例えば，クラムシュは異文化リテラシーという用語を用いて次のように説明している．

> 文化リテラシーが母語話者の知識と能力が内面化されたものであるならば、異文化リテラシーとは自文化と異文化を比較する能力であり、違いを見つけ識別するだけでなく、それを批判的に検討し、教育学的に利用する能力であるといえる。（クラムシュ 2007：15-16）

しかし Hirsch の提唱する「文化リテラシー」が唯一の「文化リテラシー」というわけでもない．外国人に対する日本語教育において細川は，Hirsch の概念とは少し異なる「文化リテラシー」観を有している．

> 個人の外側にある、枠組みとしての社会の内実としての文化を知識・情報として知ることを目的とせず、相互のコミュニケーション活動を通して、それぞれの持つ表象としてのイメージを交流させ、そのことがそれぞれにとってどのような意味を持つのかを当該のコミュニティとして検討し続けること。これが、他者の文化を認識し、自らの文化との相違や接点を模索していく作業それ自体であり、それぞれの持つ固有の文化、すなわち「個の文化」を相互に開陳し交流しあうことができる能力が、ここでの「文化リテラシー literacy of interpersonal culture」と称すべきものであり、言語教育はまさに「文化リテラシー」という力の形成のためにある（細川 2007：41）

つまり細川は，Hirsch が提唱するような共有すべき知識・情報を身につけることだけではなく，総体的にその知識・情報を認識する個人の力を文化リテラシーと捉えている．

べき事柄」をリスト化しているが，国民が共有すべき事柄を挙げているのであり，決して保守的に多文化性を排除しているわけではない，また，そのリストをただ覚えればよいと意図しているのではなく，批判的な思考能力を養うためには，基本的な知識が必要である，という立場を取っている（谷川 2001）．

3.「文化リテラシー」としてのことわざ

母語教育にせよ，外国語教育にせよ，また文化リテラシーの定義に差があるにせよ，言語を習得にするにあたっては言語そのものに関する知識だけではなく，その言語が使用されている社会において共有されている知識を知ることも大切だということは共通していると思われる．ここでは，言語教育における文化リテラシーのひとつとしてことわざに焦点を当てたい．

例えば，先述の Hirsch による国民が共有すべき知識のリストには，186 のことわざが確認できた[5]．また，ことわざ研究者である北村は，ことわざが「カルチュラル・リテラシー（異文化の読解力）の重要なキイ」だとも述べている（北村 2017：iii）．

3.1. ことわざのミニマム

ロシアのことわざ研究者 Permiakov は「ことわざのミニマム（Paremiological Minimum）」という考え方を 1980 年代に提唱している．ある言語を完全に理解するためには，文法に加えて，特定の語句だけではなく，広く用いられている最低限のことわざ的表現にも精通していなくてはならないと説明している（Permiakov 1989: 92）．そして，下記にあるように，ことわざのミニマムはいわゆる背景知識と関係しているとも指摘している（下線は筆者による）．

> The point is not only being able to recognize these clichés in any speech transformation; <u>sayings from a paremiological minimum actually relate to the so-called background knowledge</u>, that is, what is familiar to all speakers of the language and is therefore consciously or unconsciously considered by them in their dealings with one another. （Permiakov 1989: 92）

> ［ポイントは，どのような発話変換においてもこれらの定型表現を認識できるというだけではない；ことわざのミニマムにおける表現は実際，いわゆる背景知識，つまり，当該言語のあらゆる話者になじみがあり，そのため意識的，無意識的にお互いのやり取りにおいて認識されているものに関係している．］

[5] ことわざの定義については鈴木（2004）でも議論しているが，その後も，定義自体はいまだ明確にはなっていない．ここでのことわざとは，文形式であること，比喩的に用いられることを必須要件とした．基本として，聖書や，シェークスピアやディケンズなどの文学作品からの引用文は含んでいないが，聖書からの引用については，聖書から離れて比喩的に用いられているものは含んでいる．

そして，Permiakov は一般的なロシアのことわざとして 300 項目に及ぶことわざリストを発表している（Ďurčo 2014: 184，Fiedler 2014: 300）．また，フォークロア研究者であり，ことわざに関する文献を多く著している Wolfgang Mieder は，ことわざのミニマムと文化リテラシーは密接に関係していると述べており（Mieder 1994: 297），英語におけることわざのミニマム自体はまだ確立していないとしながらも，アメリカにおいて確実に高頻度で使用されていることわざとして 75 項目を紹介している（Mieder 2004: 128-130）．

3.2. 外国語教育におけることわざ

文化リテラシーという考え方に基づいているかどうかにかかわらず，外国語教育においてことわざを用いる重要性は様々なところで説かれている．先述の Mieder は第二言語教育においても，ことわざのミニマムとなりうることわざ，つまり現在使用されていることわざを教えるべきであるとも述べている（*ibid.*: 147）．そして北村は，外国語の習得においてことわざを用いる「ミニマムで学ぶ」シリーズ[6]を監修し，次のように説明している．

> 〈ミニマム〉を異文化理解の出発点として最小限必要なことわざと再解釈し、ことわざを論理的に理解するだけではなく、感覚的にも自分のものにするためのツールを目指しています。（北村 2017：iv）

一方で Fiedler は，ことわざが口頭および文面でのコミュニケーションにおいて普及しているにもかかわらず，外国語教育におけるその役割についてコンセンサスが得られていないと述べており（Fiedler 2014: 294），外国語教育においてことわざが教えられるべき理由として次の事柄を挙げている．ことわざは，(1) 多大な動機づけの可能性を示す，(2) 言語の構成要素であり，会話において重要な機能を示す，(3) 比喩的な言い回しを理解する能力を助ける，(4) 文化に関する洞察力をもたらす，(5) その知識が言語使用の受容，生産ともに有利となる，である（*ibid.*: 296-299）．

外国語教育におけることわざの重要性はことわざ学者によってのみ主張されているわけではない．外国語教育におけることわざを含む複数語表現の重要性については，CEFR[7]（ヨーロッパ言語共通参照枠）においても指摘されている．学

---

[6] ミニマムで学ぶことわざシリーズは 2018 年 9 月現在，英語，フランス語，韓国語が出版されており，中国語，ドイツ語，スペイン語の続刊が予定されている．

[7] CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）は，ヨーロッパ全体で外国語学習におけるカリキュラムの作成，教授，習熟度の評価に用いられるガイドラインである．

習者の能力として，コミュニケーション言語能力（Communicative language competences）の社会言語学的能力（Sociolinguistic competence）のうち，世間の知恵（Expressions of folk wisdom）においてことわざが挙げられている（CEFR 2001: 120）．しかし，どういったことわざがどのレベルにおいて教えられるのか，その点については触れられていない．

それでは，外国語教育で用いられることわざはどのように選択されるのであろうか．1980 年代以降，ことわざの「ミニマム」という考え方は現在に至るまで存在しているが，ことわざ同様にミニマムの定義は明確になっていない（Ďurčo 2014: 183）．つまり，どのようにミニマムが選択されるべきかについても明確になっていないのである．様々な言語でミニマムをリストアップする試みは行われているが，その手法は決して画一的なものではない．ミニマムの選定については，当該言語の母語話者を対象に様々なアンケート方式で行われるものもあれば，諸々のコーパスが用いられることもある．Ďurčo はスロバキア語のことわざについて，アンケートによる実証的アプローチとコーパスに基づく選定方法を模索している（*ibid.*: 191-200）．

実際の言語使用を分析するには，コーパスを利用することは不可欠であろう．最近では，書き言葉に基づくコーパスだけではなく，話し言葉に基づくコーパスも作成されている．映画やドラマなどフィクションの話し言葉をデータとしているものもあるが，一般の人に日常生活で生じる会話を収録してもらうという手法も登場している[8]．しかし，ことわざの使用実態は決してコーパスにおける数で示されるものでもないようである．武田は，ことわざの「重み」と使用頻度がはたして比例するのか，コーパスによる頻度調査を行っている．

> 事、ことわざ類に関しては、「軽いが故に口にされやすく、重いが故に軽々には口にされない」という重みと頻度の逆転現象がみられる。成句や四字熟語が対象を描写して役目を終えるその先に、ことわざには価値判断を下す役目が待っている。その重さことが、安易に口にすることを躊躇わせるのにちがいない。（武田 2018：1）

「重み」のあることわざ，つまり当該社会において重要だと思われることわざであっても，価値判断を下したり，まとめの一言であったり，ということわざの特徴から，実際の使用頻度は少ないというのである．そして，日本語のみならず，英語についても同様の調査結果であったと述べている（武田 2018：1, 3）．

---

[8] 例えば，英語では British National Corpus（BNC），日本語では『日本語話し言葉コーパス（Corpus of Spontaneous Japanese : CSJ）』が挙げられる．

教えられるべきことわざをどのように選択するかも問題であるが，ことわざがどのように教えられるべきかという点も議論が必要であろう．Fiedler はドイツ語話者への英語教育を例に，英語を学んでいるドイツの大学生に対してアンケートを行うことで，外国語教育におけることわざの用い方を検証している．まずは，英語のことわざをそれだけでドイツ語に置き換える場合，英語のことわざがほぼそのままドイツ語でもことわざとして存在している場合にはその正答率は高くなっているが，一方で，false friends[9]と呼ばれる，一見似ているようでありながら異なる表現については正答率が低くなっていることから母語の影響が確認されている（Fiedler 2014: 303-304）．次に，ことわざがコンテクストとともに示された場合，その正答率は高くなるが決して 100%となるわけではなく，それは理解できない語彙素が含まれているか，あるいは文脈を理解するのに必要な社会文化的な背景知識に欠けていることがその理由ではないかと Fiedler は述べている（*ibid.*: 304）．そのうえで Fiedler は，学生にとっては母語と当該外国語におけることわざの相違点に気付かせることが有益ではないかと指摘している（*ibid.*: 309）[10]．

3.3. デンマーク語教育におけることわざ

デンマークでは自治体ごとに，デンマーク語を母語としない外国人に対する言語教育が行われている．初級者から上級者，そして年齢や国籍などバックグラウンドの異なるさまざまな学習者が想像できる．ただし，いずれの学校に通おうとも，デンマーク語のレベルや試験内容については全国的に統一されている[11]．デンマーク語の学習内容としてことわざが特別に取り上げられているわけではないようだが，Københavns Sprogcenter（コペンハーゲン言語センター）のホームページには，イディオムやことわざを取り上げて紹介しているページがある[12]．イラストとともに紹介されているものもあり，また学習者による自由な解釈もビデオで流されている．

外国語教育におけることわざの取り扱いについて，北村の監修による「ミニマムで学ぶことわざ」シリーズや，Fiedler を参照し，特に日本人デンマーク語学習者向けのことわざについて考えてみたい．

Fiedler は二言語間のことわざの相関性を 4 つのタイプに分類している．(1) 完

---

[9] False friends（偽の友だち）については鈴木（2006）を参照．

[10] 母語と外国語を比較することによる「ことばへの気づき」については，初等教育における外国語教育でも指摘されている（浦谷 2018）．

[11] 外国人向けデンマーク語教育のレベル一覧．CEFR の基準も参照している．http://uim.dk/filer/danskuddannelse/model-danskundervisning-og-danskuddannelse-1-2-3.pdf

[12] https://www.kbh-sprogcenter.dk/da/blog/danske-ordsprog-talemaader/

全に等価（一致）のもの（total equivalence），（2）部分的に等価なもの（partial equivalence），（3）等価ゼロのもの（zero-equivalence），（4）疑似等価のもの（pseudo-equivalence）である（Fiedler 2014: 309-310）．しかし，「見た目」だけではなく，語彙的にも用法的にも完全に一致することわざというものは実際にはほとんど存在しない．一方で，文構造あるいは語彙素における若干の差異が認められる部分的に等価なことわざは，文化的背景を共有している，特にヨーロッパ言語において多く認められるだろう．疑似等価のことわざとは，つまり false friends と呼ばれる表現である．同一の構成要素であり，同一のイメージをもたらしながら，意味や用法が異なるものである．

3.3.1. 日本語とほぼ合致するデンマークのことわざ

日本語とデンマーク語では表記も文法構造も異なるため，完全に一致する表現はないとも言える．しかし，使用されている単語や用法が似ているものは存在している．母語ですでに知っていることわざがデンマーク語でも表現できることが分かれば，それらのことわざをデンマーク語で使用できるのではないだろうか．ここにその例をいくつか挙げてみたい．

（1）Væggene har ører.
［壁は耳を持っている］

日本語では「壁に耳あり」である．誰かが聞いているかもしれないといった状況で注意を促すときなどに用いられる．

（2）Smede mens jernet er varmt.
［鉄は熱いうちに打て］

日本語でも「鉄は熱いうちに打て」と言う．古代ローマから存在することわざで，日本には江戸時代後期にまずはオランダ語を通じて入ってきた表現である[13]．チャンスが訪れたら速やかに行動せよ，といった意味合いである．日本語では，頭の固くなる前に，若い間に鍛えよ，といった意味合いでも用いられることがあるが，これは日本独特の解釈であることに注意が必要である．

そして，合致の度合いとしては低くなるかもしれないが，同じ考え方を有していることわざも存在している．

[13] 日本への定着過程については北村（2003）を参照．

(3) Sælg ikke skindet, før bjørnen er skudt.
［クマが撃たれる前にその皮を売るな］

まだ決まっていないことを，決まったものとして話を進めてはならないという意味である．日本語では「捕らぬ狸の皮算用」となる．戒めの意味合いから，デンマーク語では基本的に否定形で表現される[14].

その他，聖書に由来する表現にも語彙や解釈が合致するものが見られる．

(4) Man skal ikke kaste perler for svin.
［豚に真珠を投げてはいけない］

価値のあるものをその価値の分からない者に与えても無駄である，という意味である．ことわざとしては，聖書の原典に近い否定形で表現されるが，現在ではイディオムとして kaste perler for svin［豚に真珠を投げる］のみで用いられることも多い[15]．また，日本語では「豚に真珠」のみで表現されるが，デンマーク語ではそこまで省略されず動詞 kaste を必ず伴っている[16].

3.3.2. 日本語に一致が見られないデンマークのことわざ

次に，日本語には一致する考え方や表現が存在してないデンマーク語のことわざについて，いくつか挙げてみたい．

(5) Gammel kærlighed ruster ikke.
［昔の愛は錆びない］

昔の愛，つまり若いころの愛は年を取っても忘れない，という意味である．もちろん恋愛について表現できるわけだが，若いころに夢中だった事柄についても用いられる．

---

[14] KorpusDK で “bjørnen er skudt” と検索すると 8 例がヒットし，そのうち，ことわざそのまま（否定形）の使用例は 3 例，残りはヴァリエーションとなっており，うち否定形は 3 例であった．詳細は鈴木（2004）を参照.

[15] 鈴木（2004）を参照.

[16] KorpusDK で “perler for svin” と検索すると 8 例がヒットし，いずれもこのことわざのヴァリエーションであった．そして 8 例とも動詞 kaste を伴っていた.

(6) To sjæle, en tanke.
［2 つの魂，1 つの考え］

2 人の人がまさに同じ考えを思いついたときなどに表現される．このことわざは，場合によっては日本語の「以心伝心」に通じるところがあるかもしれない．しかし，デンマーク語のことわざが同時に思い付いた状況を表現するのに対し,「以心伝心」は心が通じ合うことを示すため, 微妙に異なると言える.

3.3.3. 日本語とデンマーク語で一見似ていることわざ

それでは，日本語とデンマーク語で似ていながらも異なることわざを見てみよう．3.3.1 で挙げた「鉄は熱いうちに打て」ということわざも日本語の解釈次第では false friends と呼べるかもしれない.

(7) Tid er penge.
［時は金である］

日本語では「時は金なり」と言うが，これは英語 time is money から日本語に翻訳されたものであり，アメリカの政治家・発明家として著名なベンジャミン・フランクリン（1706-1790）の言葉としてよく知られている[17]．デンマーク語のことわざがフランクリンの言葉と結び付けられているかは明確ではないが，英語のことわざと同様に，デンマーク語のことわざも日本語の「時は金なり」と微妙にニュアンスや用法に差が見られる[18]．日本語では，貴重な時間を有効に使いなさい，といった意味合いから道徳的に使われる傾向にあるが，デンマーク語ではあくまでも金銭的な事柄について表現されることに注意が必要である[19].

3.3.4. その他のことわざ

その他，語彙，文法事項，文化的な知識を学べる題材となりうることわざも外国語教育におけることわざのミニマムに含められるのではないだろうか．語彙では前置詞句や決まり文句，文法事項では現代文法から逸脱する表現などもあるだろう．いくつか例を挙げてみる.

---

[17] 「時は金なり」という表現が明治期の日本にどのように定着したかは北村（2003）を参照.
[18] 英語のことわざの用法については北村（2017）を参照.
[19] KorpusDK には修正などが加えられていない “tid er penge” そのままの表現が 18 例あり，いずれも金銭的なニュアンスを含んでいることが確認できた.

(8) Som fader, så søn.
［父親のように息子］

西洋語に倣った日本語の表現「この父にしてこの子あり」もあり，親と子供が似ていることを表現している．ただし日本語では「蛙の子は蛙」の方がなじみのある表現であろう．デンマーク語の語彙で特筆できるところは fader が現在一般的に用いられている far の古い形だという点，そして主語と動詞を持たない形であることも特殊と言える．また，Som moder, så datter.［母親のように娘］とも表現される．

(9) Af børn og fulde folk skal man høre sandheden.
［子どもと酔っ払いに真実を聞きなさい］

文字通りに子どもや酔っ払いが真実を語ることもあるだろうが，子どもや酔っ払いではない普通の人は常に本心を語るとは限らない，あるいは普通の人は真実を直視することを恐れる，といった意味合いが含まれる．このことわざでは倒置が行われていることが指摘できる．副詞的語句である af børn og fulde folk「子供と酔っ払いに」を文頭に置くのは，強調する目的であると考えられる．また前置詞についても指摘できるだろう．行為者を示す af「～によって」が用いられている[20]．

4. おわりに

外国語学習者にとって学習が必要となる事柄は，当該言語の文法や語彙だけでは決してない．表面的に言葉の意味が分かったとしても，その表現によって本当は何を意味しているのか，何を伝えたいのか，その真意をつかむことは実は難しい．（もちろん母語においても様々な要因から意思疎通を難しいと感じることはある．）そのバリアを克服できるものが文化リテラシーと呼ばれるものなのであろう．

文化リテラシーの力を蓄えていく方法としては，その国の歴史や政治，宗教を学ぶことも一手段であろう．流行りを知ることも重要かもしれない．しかし，その国で使われていることわざを学ぶことも文化リテラシーの鍵になるのではないだろうか．ことわざには表面的な言葉を伝えるだけではなく，価値判断や行動指針を示すという側面があり，ことわざを知ることによって，使用する人の考え方

[20] ただし，af の代わりに発信者を示す fra「～から」が使われることもある．KorpusDK では，このことわざ（省略や修正などのヴァリエーションの形を含む）が 8 例あり，うち 7 例で af が使われ，fra は 1 例であった．

を論理的，場合によっては感覚的に身につけられるのではないかと考える．

外国語学習において実際にことわざを教授する際には，単にことわざとその訳を提示するだけでは不十分であろう．さまざまな文脈に現れることわざを題材にすることで, どのような状況でことわざが用いられ, どのように解釈されるのか, ことわざの持つ意味に加えて文脈におけるその役割を獲得することができるだろう．また，教えるべきことわざは，辞典に収録されていることわざではなく，当然のことながら実際に頻繁に使用されているものが適当であろう．そして，語彙だけではなく文化面での母語との比較による気づきの学習も有益となろう．

日本人学習者にとって有意義となるデンマーク語のことわざミニマムを本論で紹介することはできなかったが，今後のことわざ選定の参考となるならば幸いである．

(2018.9)

Cultural Literacy for Foreign Language Learners

Danish Proverbs for Japanese Learners as one Example

Masako Suzuki

Summary

"Cultural Literacy" is a term which was coined by E. D. Hirsch, Jr., an American educator, in the 1980s, and he explained that "to be culturally literate is to possess the basic information needed to thrive in the modern world." Based on this idea, he made a list of about 5,000 essential names, phrases, dates and concepts that every American needs to know. His purpose was also to provide children in the United States with basic knowledge. The idea of this Cultural Literacy has taken root in language education itself, and it is now not only applied to the first language education, but also adapted into foreign language education.

In the meantime, a Russian paremiologist, Permiakov, advocated a term "Paremiological Minimum" also in the 1980s, and explained that sayings from a paremiological minimum actually relate to the so-called background knowledge. There are other paremiologists, such as Wolfgang Mieder, Fiedler and Kitamura, who followed this idea and proposed to use proverbs in both mother tongue and foreign language education. They tried to work out a list of paremiological minimum, but at the moment there is no decisive method to make such a list, as well as there is no definition

yet of a proverb itself. Still, proverbs can be acknowledged as one factor of Cultural Literacy.

In language education, which proverbs should be taught is one issue, but how they should be taught is another issue. By conducting a questionnaire study, Fiedler, besides confirming proverbs should be incorporated into foreign language teaching, pointed out that most frequently used proverbs should be taught and learnt in context, and that the contrastive perspective should be considered.

Referring to Fiedler's study and Kitamura's book about learning English proverbs based on the minimum, I considered what kinds of Danish proverbs could be taught to Japanese students. Firstly, Danish proverbs which are mostly common with Japanese ones both in lexical and pragmatic ways, such as "væggene har ører (the walls have ears)," and those, which are based on the similar idea, such as "sælg ikke skindet, før bjørnen er skudt (do not sell the skin, before the bear is shot)." Secondly, Danish proverbs which have no equivalence in Japanese, such as "gammel kærlighed ruster ikke (old love does not rust)." Thirdly, Danish proverbs which have false friends in Japanese proverbs, that is, they have identical constituents and are based on the same image, but carry different meanings, such as "tid er penge (time is money)." Lastly, Danish proverbs in which lexical, grammatical, or cultural knowledge can be pointed out, such as "Som fader, så søn (like father, like son)."

For foreign language learners, it is not enough to study only grammar, vocabulary and such. Even though you know the meaning of each word, it is often still difficult to understand the true meaning the speaker intended to deliver. Cultural Literacy can be considered as a key to overcome such difficulties, with proverbs as one factor. Proverbs deliver not only words themselves. They are sometimes metaphorical and they are sometimes based on the cultural value. By knowing such proverbs, the learners might be able to gain a way of thinking logically, and eventually acquire them sensuously.

Hopefully, some of the examples of Danish proverbs provided in this article, could be help to select a list of paremiological minimum of Danish proverbs, which would be useful for Japanese learners.

参考文献

浦谷淳子．2018.「小学校英語教育におけることばの教育―日英比較によることばへの気づき（メタ言語意識）を土台にして―」（口頭発表），日英言語文化学会第 66 回定例研究会.

北村孝一．2003.『ことわざの謎――歴史に埋もれたルーツ』．東京：光文社新書.

――．2017.『ミニマムで学ぶ英語のことわざ』．東京：クレス出版.

クラムシュ，クレア（矢部まゆみ訳）．2007.「異文化リテラシーとコミュニケーション能力」，佐々木倫子他編，『変貌する言語教育―多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か』．2-26．東京：くろしお出版.

鈴木雅子．2004.「ことわざの定形性とイディオムの関連について―デンマーク語における具体例から―」，『IDUN－北欧研究－』第 16 号．55-74．大阪：大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語研究室.

――．2006.「辞典におけるイディオム－デンマーク語」，『EX ORIENTE』第 13 号，151-172．大阪：大阪外国語大学言語社会学会.

角知行．2005.「日本人の読み書き能力調査」（1948）の再検証」，『天理大学学報』第 56 巻第 2 号，105-124．天理：天理大学.

武田勝昭．2018.「ことわざの重みは頻度と比例するか」，『たとえ艸』第 87 号，1, 3．東京：ことわざ学会.

谷川とみ子．2001.「E. D. ハーシュの「文化的リテラシー」論に関する一考察―Core Knowledge Foundation の実践分析を通して―」，『教育方法学研究』第 27 巻，11-20．広島：日本教育方法学会.

細川英雄．2007.「日本語教育における『学習者主体』と『文化リテラシー』形成の意味」，佐々木倫子他編，『変貌する言語教育―多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か』．27-46．東京：くろしお出版.

森住衛．2016.「「文化」とは何か」，『AJELC 創立 10 周年記念随想集～言語・文化・教育に思いを寄せる～』202-207．東京：日英言語文化学会.

CEFR: *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. 2001. Ed. by Modern Language Division, Strasbourg. https://rm.coe.int/1680459f97

Ďurčo, Peter. 2014. “Empirical Research and Paremiological Minimum”, Hrisztalina, Hrisztova-Gotthardt & Melita, Aleksa Varga (eds.), *Introduction to Paremiology: A Comprehensive Guide to Proverb Studies*. 183-205. Warsaw/Berlin: De Gruyter Open Ltd.

Fiedler, Sabine. 2014. “Proverbs and Foreign Language Teaching”, Hrisztalina, Hrisztova-Gotthardt & Melita, Aleksa Varga (eds.), *Introduction to Paremiology: A Comprehensive Guide to Proverb Studies*. 294-325. Warsaw/Berlin: De Gruyter Open Ltd.

Hirsch, Jr., E. D. 1987. *Cultural Literacy: What Every American Needs to Know*. New York: Vintage Books.

Mieder, Wolfgang. 1994. “Paremiological Minimum and Cultural Literacy”, Wolfgang Mieder (ed.), *Wise Words. Essays on the Proverb*. 297-316. New York/London: Garland Publishing.

——. 2004. *Proverbs: A Handbook*. Westport, Connecticut: Greenwood Publishing Group.

Permiakov, Grigorii L’vovich. 1989. “On the question of a Russian paremiological minimum”, *Proverbium* 6:91-102.

辞典

『広辞苑』第 7 版. 2018. 東京：岩波書店.

『日本国語大辞典』第 2 版. 2002. 東京：小学館.

コーパス

Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. *KorpusDK*. https://ordnet.dk/korpusdk